



第 1 日

国 語

(9 : 30 ~ 10 : 20)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1ページから13ページに、問題が一から四まであります。  
これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

何もやる気になれず、鬱々とした日々を過ごしていた篤は、叔父に勧められるままに呼出の見習いとして相撲部屋に入門し、坂口や武藤といった力士たちと一緒に生活することになった。呼出の兄弟子に当たる直之や、ベテランの進に憧れ、彼らのようになりたいと意識し始めた篤だが、客が自分の呼び上げを下手だと笑うのを聞いてしまう。進から、直之が毎晩練習していると聞いた篤は、自主的に練習を始めたが、翌日、四股名を間違えて呼び上げてしまい、篤は師匠の自室に呼び出された。

「お前、今日みたいに四股名間違えるんじゃないぞ。気を抜くからああいうことになるんだ。」と叱られた。

はい。すみません。今朝審判部に注意されたときのように、師匠に向かって頭を下げる。「顔上げろ。」言われた通り顔を上げると、「心技体」と書かれた書が見えた。同じものが稽古場の上がり座敷にも飾ってあるが、師匠の知り合いの書道家の作品らしい。「心技体」の文字を篤が目にしたことがわかっているのか、師匠は「力士は、心技体揃ってようやく一人前と言われるが、技でも体でもなく、心が一番大事なんだ。心を強くもつていなければ、技も身につかないし、丈夫な体も出来上がらない。」と話を続けた。突然話題が変わったことに戸惑いつつ、はいと頷く。「呼出のお前には心技体の体はまあ、そんなに関係ないけれど、それでも心が大事なのは力士と変わらねえぞ。自分の仕事を

しつかりやると思わなければ、いつまでたっても半人前のままだ。お前だって、できないことを叱られ続けるのは嫌だろう。」

はいと弱々しく返事をすると、師匠は語気を強めて篤に言い聞かせた。「だったら、自分がどうすべきかちゃんと考えろ。」黒々とした大銀杏が結わえられていた現役時代に比べ、今の師匠は髪の毛がずいぶん薄い。加齢で顔の皮膚もたるんでいる。しかし、いつぞやインターネットで見た若かりし頃の写真と同様に、師匠の目には人を黙らせるほどの強い光があった。何度目かのはい、という返事を口にする、師匠の話が終わった。

師匠の自室を出て、一階まで降りると、篤は廊下の一番奥にある物置へ向かった。念のため、まわりに誰もいないのを確認する。扉を開けると、何も持っていない右手を胸の前でかざした。ひがああしいいーはああああのおおー……にいいいいいい……息を継ぐ合間に、扉を叩く音が聞こえた。

「篤、そこにいるんだろ。」声がするのとほぼ同時に、扉が開いた。扉の外にいたのは坂口さんだった。手には、ミルクティーのペットボトル。二十四時間ほど前にも見た、デジャヴのような光景だ。「ほれ、差し入れ。お前、昨日もの欲しそうな顔してたから買ってきてやったんだぞ。感謝しろよ。」坂口さんがぶつきらぼうに言っけてペットボトルを差し出す。ありがとうございますと軽く頭を下げ、それを受け取った。結局今日はミルクティーを飲み損ねていたので、この差し入れはありがたい。顔を上げると坂口さんと目が合った。

「お前、今日も練習するんだな。」「ああ、はい。」「嫌になんねえの。」

せつかくやる気出した途端、失敗してめっちゃ怒られて。」さきほどよりも声を落として、坂口さんが尋ねる。「……なんか失敗したからこそ、やらなきゃいけない気がして。」光太郎と呼ばれた兄弟子の嫌味な口調を思い出すと、胃がぎゅつと絞られるように痛む。それでも、進さんが助けてくれた。師匠も、わざわざ篤に話をしてくれた。明日こそは失敗してはいけない。そう自分に言い聞かせ、篤は物置に籠もった。

※1 「まあ、そうだよな。」坂口さんは頭を掻くと、もしも、と言葉を続けた。「お前が昨日の一回きりで練習やめてたら、俺も今日普通にゲームしてたかもしれない。」え？ と聞き返すと坂口さんは遠くをちらりと見て、重々しく口を開いた。「俺、一緒にトレーニングしたいって武藤に言おうと思う。」坂口さんの視線の先には、電気をついた一室があった。武藤さんが毎晩籠もっているトレーニングルームだ。あの部屋で、武藤さんは今もダンベルを持ち上げているのだろう。「そうなんすか。」坂口さんは真剣な目をしていたのに、ありきたりな相づちしか打てなかった。兄弟子としてのプライドをいったん捨て、弟弟子と一緒にトレーニングをしようと思いつくまで、当然武藤があつたはずだ。その葛藤は、きつと坂口さんにしかわからない。「あ、俺のこと見直した

だろ？ 差し入れも買ってやってたし、ちゃんと俺を敬えよ。」わざとらしく口を尖らせ、坂口さんが篤の肩をつつく。坂口さんの葛藤はわからなくても、冗談を言って強がろうとしていることはわかった。

頑張ってくださいと坂口さんを送り出してから、篤はふたたび扉を開めた。さすがに蒸し暑かったので、もらったミルクティーのボトルを開けた。口に含むと、ほのかな甘さが沁みわたった。三分の一ほどを飲む

と、また、ひがああしいいいいー、と何度も繰り返した。 ※2

秋場所の三日目は前相撲から始まった。前相撲では、新弟子検査に合格したばかりの力士と、怪我などで長期間休場し、番付外に転落した力士が土俵に上がる。最初の一番こそ通常の呼び上げを行うが、その後は東方と西方に分かれて二人の呼出が呼び上げを担当する。しかも白扇を持たず、ただ土俵下に立って声を張り上げるだけなので、他の取組とはずいぶん勝手が違う。前相撲の呼び上げは通常、何年かキャリアのある呼出が担当するので、篤は土俵のそばで控えているだけだった。先場所も見たはずの光景だが、直之さんや他の呼出が自分よりも先に声を発するのを、新鮮な気分で見つめた。今場所は番付外に落ちた力士がおらず、新弟子も四名と少なかった。あつという間に前相撲が終了し、序ノ口の一番が始まった。

いつもと同じように、拍子木がカンカンと場内に響く。ただ、昨日までとは違い、篤は [ ] で土俵に上がっていった。ふいに篤の呼び上げを下手だと笑った客の声、光太郎と呼ばれた兄弟子の冷ややかに笑う顔が脳裏に浮かびそうになる。それらを振り払うように、見てろよと心の中で呟いた。真つ白な扇を広げて東側を向き、腹から声を出すべく、篤は大きく息を吸った。

(鈴村ふみ 「櫓太鼓がきこえる」による。)

(注1) 呼出 || 相撲で、力士の名を呼び上げる役の人。

(注2) 兄弟子 || 同じ師匠のもとに先に入門した人。

(注3) 四股名 || 力士としての呼び名。

- (注4) デジャヴ || 以前に見たことがあるように感じられる光景。  
 (注5) 嫌味な口調 || 篤が、四股名を間違えて呼び上げてしまったことに対する嘲るような口調。  
 (注6) 序ノ口 || 相撲の番付で最下級の地位。

1 ㊦㊧の漢字の読みを書きなさい。

2 新鮮④と熟語の構成が同じものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 攻防    イ 不振    ウ 洗車    エ 到達

3 ① 師匠の自室を出て、一階まで降りると、篤は廊下の一番奥にある物置へ向かったとあるが、このときの篤の気持ちを、四十五字以内で書きなさい。

4 ㊦から㊧までの部分について、国語の時間に、この部分を演じるための台本を、文章中の描写を基に、登場人物の心情について解釈しながら作成することになりました。次の【台本】は、このとき、ある班が話し合って作成したものです。これを読んで、あとの(1)・(2)に答えなさい。

【台本】	せりふと動作	せりふや動作に込める気持ち
坂口「まあ、そうだよな。」 へ頭を掻く。へ	坂口「坂口」自分のこれまでを振り返りながら、納得したような気持ちで言う。	
坂口「もしも、お前が昨日の一回きりで練習やめてたら、俺も今日普通にゲームしてたかもしれない。」	坂口「坂口」真剣に、これまでの自分と向き合うような気持ちで言う。	
篤「え？」	篤「篤」不意を突かれ、驚くような感じで言う。	
坂口へ遠くをちらりと見て、重々しく口を開く。へ	坂口「坂口」( I )。	
「俺、一緒にトレーニングしたいつて武藤に言おうと思う。」 へ電気をついた一室を真剣な目で見る。へ		

篤 へ相づちを打つ。へ 「そうなんすか。」	〔篤〕坂口の真剣さに見合う反応をしたいのに、思い浮かばないという感じて相づちを打つ。
坂口「あ、俺のこと見直しただろ？ 差し入れも買ってきてやったし、ちゃんと俺を敬えよ。」 へわざとらしく口を尖らせて、篤の肩をつつく。へ	〔坂口〕心の葛藤を隠して、何とか明るく、冗談を言って強がるような気持ちで言う。
篤 「頑張ってください。」 へ坂口を送り出して、扉を閉める。へ へもらったミルクティーのボトルを開け、ミルクティーを口に含み、ボトルの三分の一ほどを飲む。へ	〔篤〕ミルクティーを口に含んで、( II ) という気持ちで、ボトルの三分の一ほどを飲み、練習を再開する。
篤 「ひがあああしいいー、」 へ何度も繰り返す。へ	

- (1) 空欄Ⅰに当てはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。
- ア 思い付きではなく、固く決意したように言う  
 イ 仕方なく状況を受け入れたように言う  
 ウ 思いを伝えることができて安心したように言う  
 エ 高ぶる感情をなんとか抑えるように言う
- (2) 空欄Ⅱに当てはまる適切な表現を、六十字以内で書きなさい。

- 5 に当てはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。
- ア 重苦しい足取り  
 イ 軽やかにはずむ足取り  
 ウ 力のない足取り  
 エ しっかりとした足取り

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちは、花の美しさに魅せられ、花を摘みとったり切り花にしたりすることがよくあります。そんなとき、植物たちがせっかく咲かせた花を切り取るのは、植物のいのちの輝きを奪い取るという、すごくひどいことをしているようで、心苦しく感じることはありません。

しかし、私たちが胸を痛めるほど、植物たちは花を切り取られることを気にしていないはずで、植物たちには、花を切り取られても、もう一度、からだをつくりなおし、いのちを復活させるといふ力が隠されているからです。

その力は、「頂芽優勢」といわれる性質に支えられています。成長する植物の茎の先端部分には、芽があります。この芽は、もともと先端を意味する「いただき(頂)」という文字を「芽」につけて、「頂芽」とよばれます。植物では、この頂芽の成長がよく目立ちます。

しかし、茎を注意深く観察すると、芽は、茎の先端だけでなく、先端より下にある葉っぱのつけ根にも必ずあります。これらの芽は、頂芽に対して、「側芽」、あるいは、「腋芽」とよばれます。側芽は、ふつうには、頂芽のように勢いよく伸び出しません。

頂芽の成長は、勢いがすぐれており、側芽の成長に比べて優勢です。この性質が、頂芽優勢とよばれるものです。発芽した芽生えでは、この性質によって、頂芽がどんどん成長をして、次々と葉っぱを展開します。

摘みとられる花や切り花にされる花は、多くの場合、頂芽の位置にあ

ることで、心苦しきは心の晴れやかさに変わるでしょう。切り取られた花や枝は、ヨロコぶはずで、控えていた芽は、表舞台に出る機会を与えられたことになるのです。

(田中修「植物のいのち」による。)

1 ㉞㉟のカタカナに当たる漢字を書きなさい。

2  に当てはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア または イ 例えば ウ すなわち エ なぜなら

3  表舞台に出る機会とあるが、これは具体的にどのような機会ですか。三十文字以内で書きなさい。

ります。一本の茎の先端に花を咲かせているキクやヒマワリは、その⑦テンケイ的な例です。頂芽が花になっているとき、花をつけている茎を切り取って切り花にすると、残された茎の下方には、葉っぱが何枚か残ってついています。

その葉っぱのつけ根には、花が切り取られるまでは、側芽とよばれていた芽があります。上にあった花と茎が切り取られると、今度は、側芽の中で一番上にあつたものが、一番先端の芽となります。

すると、頂芽優勢によって、その芽が伸び出します。花が咲く季節なら、その芽にツボミができて、花が咲きます。あるいは、側芽のときにすでにツボミはできており、頂芽が⑧ソーンザイするために、成長できなかっただけかもしれません。いずれにしても、この植物は、再び花を咲かせます。

先端の花が摘みとられても、切り花として切り取られても、残された植物では、一番上になった側芽が頂芽として伸び出し、花が咲くのです。これが、「植物たちは、花を摘みとられることや切り取られることを、それほど気にしていない」と思われる理由です。

このことを知ると、花を摘みとったり切り花にしたりするときに、私たちが感じる心苦しきは、軽くなります。頂芽の花を切り取ることは、それまで成長を抑えられていた側芽に、成長のチャンスを与えることになるからです。これらは、頂芽に咲いた花が切り取られなければ、りっぱに花咲くことなく生涯を終える運命にあつたものです。

① 切り取った花を無駄にすることなく、花として価値ある使い方をす

4 ① 切り取った花を無駄にすることなく、花として価値ある使い方をすること、心苦しきは心の晴れやかさに変わるでしょうとあるが、次の【ノート】は、なぜ筆者の田中修さんが、心苦しきが心の晴れやかさに変わると述べているのかということについて、ある生徒がまとめたものです。また、【図書館で借りた本の文章】は、その生徒が【ノート】を書くために、準備したものです。この【ノート】の空欄Ⅰ・Ⅱに当てはまる適切な表現を、空欄Ⅰは本文の内容を踏まえて十五字以内、空欄Ⅱは【図書館で借りた本の文章】の内容を踏まえて七十五字以内で書きなさい。

【ノート】

花を切り取ったあとに感じる心苦しきは、植物たちが花を摘みとられたり、切り花にされたりしても (Ⅰ) ということを知ることで軽くなる。さらに、切り取った花をいけばなで使った場合、(Ⅱ) (こと) になるため、切り取った花を無駄にせず、価値ある使い方ができたと言える。このように切り取った花を価値ある使い方をすることで、心苦しきは晴れやかさになると、筆者の田中修さんは述べているのではないかと考える。

【図書館で借りた本の文章】

いけばなは、生きている草や木を切つて材料とします。たいていの草木は切られても水に養えば、すぐに枯れてしまうことはあ

りません。しかし、大地から切り離されて、多少ともその生命が縮められたことは確かです。いけばなの材料となる花材が、単なる素材と違うのは、まさにこの生命をもっているところからです。草木の花や葉が美しいのは生命のはたらきに裏づけられています。花や葉を觀賞することは、同時にその生命の有様を見つめることでもあります。花をいけるといふ行為が、まず、何よりも花を生かすことといわれるのも、そこに根拠があるのです。いけばなには、数百年にわたって多くの人々に培われてきたさまざまな技法、手法の集積がありますが、そのすべてのものが、花の生命をいつくしむ心から生まれているのです。

〔いけばな入門 基本と実技〕による。

問題は、次のページに続きます。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【漢文】

伏スルト久シキ者ハ、飛フコト必ズ高ク、開クコト先ナル者ハ、

謝スルト独リ早シ。知ラバ此コト、可ベク以モツテ免ズル二注1躓シ躓シ

之ノ憂ヒラ、可シ以テ消ス二注2躁シ急キ之ノ念ヲ。

(書き下し文)

伏すこと久しき者は、飛ぶこと必ず高く、開くこと先なる者は、謝  
長く地上に伏せて力を盡して 他よりも先に吠いた者は 敗つて  
いた鳥は

すること独り早し。 [ ]、以て躓躓の憂ひを免るべく、以て躁  
しなうこと 避けることができ

急の念を消すべし。

消すことができる

〔葉根譚〕による。

(注1) 躓躓 Ⅱ 足場を失つてよろめくこと。

(注2) 躁急 Ⅱ あせつて、気持ちがいらだつこと。

1 [ ] に当てはまる書き下し文を書きなさい。

2 飛フコト必ズ高クとあるが、次の文は、これが何を例えているか  
を述べたものです。空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、現代の言葉を  
用いて十字以内で書きなさい。

人が(Ⅰ)を、「鳥が高く飛ぶ」という表現で例えている。

○

○

○

○

3 田中さんの学級では、国語の時間に、【漢文】の内容を踏まえて、

新聞の「お悩み相談」に掲載された記事の投稿者に返事を書くという  
課題に取り組むことになりました。次の【記事】は、新聞の「お悩み  
相談」に掲載された記事で、【生徒の会話】は、この課題に取り組む  
過程で、田中さんの班が行ったものです。これらを読んで、あとの(1)・  
(2)に答えなさい。

【記事】

中学生 十四歳

私は中学校に入学して、陸上競技部に入りました。特に力を入れ  
て取り組んだ種目は走り幅跳びです。毎日休まず練習したけれど、  
三年生になってからは、走り幅跳びの自己ベスト記録を一度も更新  
することができませんでした。先週の中学校での最後の大会でも、  
私は自己ベスト記録を更新することができませんでした。大会が終  
わると、引退の寂しさとともに、悔しさで涙があふれました。そし  
て、このまま高校で陸上競技部を続けても、結果は出せないのでは  
ないかと思うようになりました。でも、先日の放課後、グラウンド  
の近くを通りかかると、やっぱり私は陸上競技が好きだと思いました。だ  
から、今は、高校でも陸上競技部を続けるのか、他のスポーツにチ  
ャレンジしてみるのかを悩んでいます。高校に入学するまで、しつ  
かり考えてみようと思うのですが、よいアドバイスがあればお願い  
します。

1 [ ] に当てはまる書き下し文を書きなさい。

2 飛フコト必ズ高クとあるが、次の文は、これが何を例えているか  
を述べたものです。空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、現代の言葉を  
用いて十字以内で書きなさい。

人が(Ⅰ)を、「鳥が高く飛ぶ」という表現で例えている。

【生徒の会話】

田中… 新聞の「お悩み相談」に掲載された記事の投稿者へのアド  
バイスは、どんな風に書いたらいいのかなあ。【漢文】の内  
容を踏まえて、書くんだよね。  
木村… 【漢文】の筆者が伝えたいことは、(Ⅰ)Ⅱ(Ⅰ)とい  
うことだよね。だから、高校でも陸上競技部を続けるかどうか  
については、(Ⅰ)Ⅲ(Ⅰ)という内容を伝える返  
事を書きたいな。

(1) 空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、現代の言葉を用いて三十字以  
内で書きなさい。

(2) 空欄Ⅲについて、あなたならどのような内容を伝えますか。空欄  
Ⅲに当てはまるように、【漢文】の内容と【記事】の内容を踏まえ、  
現代の言葉を用いて七十字以内で書きなさい。

四 青木さんの班では、技術・家庭科の時間に実施される保育実習に向けて「絵本の読み聞かせ」の準備を行っています。次の【ノート】は、保育実習に関する説明を聞いて、青木さんがまとめたもので、【資料1】・【資料2】は、青木さんたちが、読み聞かせに使う絵本を選ぶために、調べて準備したものです。また、【生徒の会話】は、青木さんの班が、読み聞かせに使う絵本を選ぶ過程で行ったものです。これらを読んで、あとの【問い】に答えなさい。

【ノート】

保育実習での絵本の読み聞かせについて

- 1 目的 「幼児との触れ合い方の工夫を学ぶ」
- 2 読み聞かせを行う対象 年中（4歳児）クラス
- 3 読み聞かせを行う時間 20分間
- 4 絵本を決定するために
  - (1) 年中（4歳児）の特徴について
    - ・話し言葉がほぼ完成し、想像力が豊かになる。
    - ・知的好奇心が増す。
    - ・想像する力や思考する力の土台が育まれる。
    - ・コミュニケーション能力を育む上で、重要な時期である。
  - (2) 事前の打ち合わせで、保育士さんから聞いたこと
    - ・絵本で知ったことや見たことを、実際に見たり、体験したりすることが大好きである。（「ホットケーキ作り」、「シャボン玉遊び」等）
    - ・「現実には起こりそうに無い、あつと驚くような出来事が起こる物語の絵本」や「いろいろな生き物が出てくる図鑑のような絵本」に興味がある！

【生徒の会話】

青木.. 九月上旬に行われる保育実習の中で、私たちは子供たちに絵本の読み聞かせをすることになっているね。図書館で本を選ぶ前に、【ノート】や、みんなで調べた【資料1】・【資料2】を参考にして、どんな種類の絵本を読み聞かせたらよいかを決めていこう。

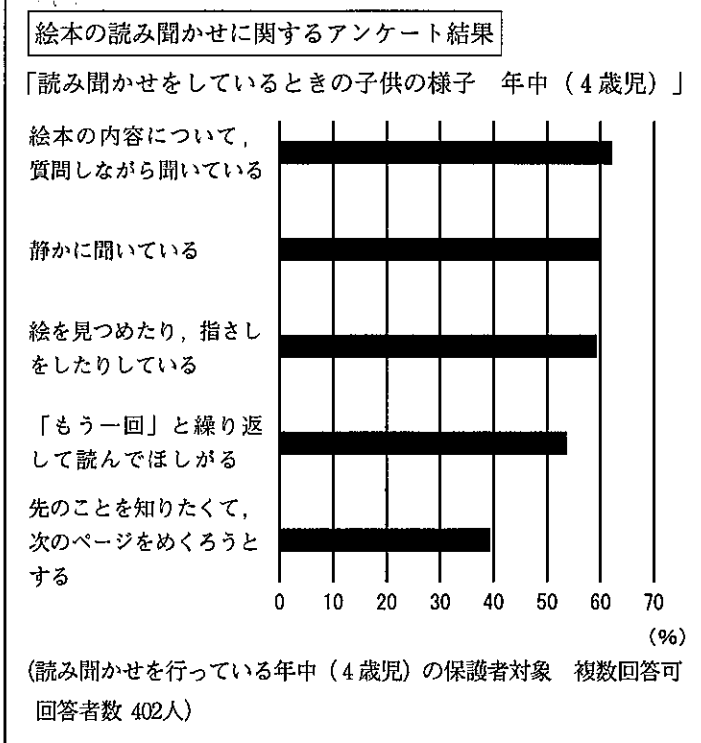
野村.. いい考えだね。私たちの担当する年中（四歳児）の子供たちは、「現実には起こりそうに無い、あつと驚くような出来事が起こる物語の絵本」や「いろいろな生き物が出てくる図鑑のような絵本」に興味があるということだったよね。読み聞かせをしてあげられる時間が二十分間しかないから、この二種類のうちのどちらの種類の絵本がよいかを決めて、その後、実際に図書館に行つて、具体的な絵本をみんなで見繕いだらいいと思わない？

青木.. そうしよう。では、まず、どちらの種類の絵本がいいか、みんなの意見を言ってみてよ。

和田.. 私は、絵本の読み聞かせの時に、絵本の内容について質問しながら聞いている子供が多いみたいだし、四歳児は知的好奇心が増すと技術・家庭科の時間に習ったから、生き物や植物を題材とした図鑑のような絵本を、クイズ形式にして読み聞かせをしたらいいと思うな。

野村.. なるほど……。今後、子供たちは芸術鑑賞で劇を鑑賞したり、遠足で水族館に行ったりする予定だよな。だから、

【資料1】



(ベネッセ教育総合研究所 「幼児期の家庭教育調査」(2018)により作成。)

【資料2】

年中クラスの今後の主な行事予定	
九月下旬	芸術鑑賞(劇「ピノキオ物語」)
十月中旬	遠足(水族館)
十二月上旬	園で育てたサツマイモの芋掘り・焼き芋の会
二月下旬	発表会(音楽劇「かくや姫」)



私はわくわくするような冒険の物語や、海の生き物が主人公の物語などを、役に合わせて声色を変えて読んだらきつと盛り上がりやすいと思うなあ。

本田.. 私も野村さんと同じよ。子供たちは芸術鑑賞も近々あるみたいだし。想像力が豊かになったり、初めて知る物語の世界に好奇心が高まったりする時期だから、何回も読みたくなる、わくわくするような物語の絵本がいいな。青木さんはどう？

青木.. ( I )

【問い】

青木さんは話し合いの中で、読み聞かせに使う絵本は、物語の絵本がよいか、図鑑のような絵本がよいか、どちらがよいか意見を求められました。青木さんは、【生徒の会話】を踏まえて、「図鑑のような絵本がよい」という意見を述べようとしています。あなたが青木さんなら、班員の間で合意を形成するために、どのような発言をしますか。次の条件1・2に従って、空欄Iに当てはまる発言を書きなさい。

- 条件1 【ノート】・【資料1】・【資料2】の内容を参考にして、合意を形成できるように書くこと。
- 条件2 二百五十文字以内で書くこと。なお、解答は、実際に話すときに使う言葉で書いてもよい。

